

文 章 講 座 ② メタ・ディスクースを削る、

文章を書いていると冗長（述べ方が長つたらしく、無駄のあること。）になる。それはどうしてかというと、書いているうちに「ああでもないこうでもない」と考え、だらだら書いてしまうからだ。また、自分の表現に自信が無くなり、言い訳めいで「～と思う。」「～ではないだろうか。」「～なくもない。」というように、婉曲（表し方が遠回しなこと。）表現になってしまふのだ。

しかしそれらは書き手の言い訳であつて、読み手は一切そんなことは気にしない。読み手は「つまり何が言いたいの？」と思いながら読んでいる。書いてあることが回りくどいと読む気がなくなる。読み手はダイレクトに伝わる文章を求めているのだ。

以下の説明は「自己表現力の教室」（向後千春他著 情報センター出版局）からの引用である。「メタ・ディスクースを削る」とはどういうことか読んでみよう。

「文章を書いているとつい長くなってしまう」という人がたまにいる。「こういう人の文章は「自分はこの文章をこういう気持ちで書いていて、こんな風に読んでほしいのだ」という説明が多い。これを「メタ・ディスクース」という。

メタ・ディスクースというのは、「いま書いている内容について、それを読者にどのように理解してほしいか」について書いたものである。次の例文を見てみよう。

私がこの記事で書くように編集者から提示されたテーマは、情報教育であった。ここで私が主張したい最も重要なことは、情報教育が学校でうまく指導されるためには、まず教員自身が情報化されなければならないということだ。しかし、私が見るところでは、教員自身の情報化は悲惨なほど進んでいない。これが私の考えの出発点である。

まず最初の文「私がこの記事で書くように編集者から提示されたテーマは、情報教育であった」はすべてメタ・ディスクースである。これは、「これから書く内容が情報教育である」ということを読者に伝えている。

次の文の先頭「ここで私が主張したい最も重要なことは」もメタ・ディスクース。続く内容を読者に強調したいということを伝えている。そして、内容がくる。「情報教育が学校でうまく指導されるためには、まず教員自身が情報化されなければならない」ということだ。これが内容になる。

次の文の先頭「しかし、私が見るとこでは」もメタ・ディスクース。自分が観察した範囲内でという限定で、事実の限定をしている。「教員自身の情報化は悲惨なほど進んでいない」中の「悲惨なほど」というのもメタ・ディスクースである。作者が読者に「悲惨さ」を感じてほしいことを伝えている。最後の文「これが私の考えの出発点である」もメタ・ディスクース。つまり、この文章の大部分がメタ・ディスクースからなっている。もし、メタ・ディスクースを全部削つて書き直してみると次のようになるだろつ。

情報教育が学校でうまく指導されるためには、まず教員自身が情報化されなければならない。しかし、教員自身の情報化は進んでいない。

もともと153文字あつた文章が、62文字になつた。半分以下である。両方の文章を読み比べてみると、どうだろうか。字数の多い文章のほうが、書き手の力が入つているのが見えるのに対し、メタ・ディスクースをすべて削つた文章は、素つ気ない。素つ気ないけれども訴える力は強い。なんの躊躇もなく中心的な問題に切り込んでいく小気味よさがある。用心深く文章を書くと、ついメタ・ディスクースが多くなってしまう。しかしその部分をできるだけ削るようにすると、短くても訴求力の強い文章を書くことができる。

ちなみに、このプリントの冒頭の文章（285文字）をメタディスコースいっぽいに書き直すといつなる。

文章を書いていると冗長（述べ方が長つたらしく、無駄のあること。）になると思う。それはどうしてなかかということを書いてみると、書いているうちにああでもないこうでもないと考え、だらだら書いてしまうからではないだろうか。また、自分の表現に自信が無くなつたり、言い訳めいたりして「～と思う。」「～ではないだろうか。」「～なくもない。」というように、婉曲（表し方が遠回したこと。）表現をしてしまうことが挙げられる。しかしそれらは書き手の言い訳という理由が挙げられると思うが、読み手は一切そんなことは気にしないと思う。読み手は「つまり何が言いたいの？」と思いながら読んでいるのではないか。書いてあることが回りくどいと読む気がなくなる人は多いはずだ。読み手はダイレクトに伝わる文章を求めているというのが一般的な意見になるはずだ。（361文字）

76文字も無駄に使っていることがわかる。

婉曲表現には、次の種類がある。これらは話し言葉では、間を空けて相手の理解を促す時間として使えるが、書き言葉では必要ない。書いてある文章を読むのは、読み手であるし、読み手は自分のペースで読み続けたり、ちょっとと読むのをやめて考えたり、もとに戻つたりできるからだ。文章を書くときは、次のような言葉を使うのを避けよう。

文末

（イ）「～れはあくまでも自分個人の考えだ」と濁す。

（ロ）自分で言い切らず、読み手に判断を任せせる。

（ハ）「思った」「考えた」よりもさらに主張の弱い、「自分の感覚」として表現する。

（二）自分が考えたことではないと、責任の所在を不明確にする。

（ヘ）その語を断定せず、他のものも含む意味を匂わせる。

附属語（単語に付ける語）

（ホ）無意味に複数を表すことによって、「それだけではないよ。」といつ二コアンスを含ませる。

（チ）自分の「感覚」または、受け売りだということを匂わせる。

（リ）与えられたタイトルを冒頭に再度書き、自分の筆を進めさせる。

文頭

（ト）読み手に自分の主張を強く印象づけようとする。

（ナ）「やつぱり」「結構」

（チ）自分の「感覚」または、受け売りだということを匂わせる。

（リ）与えられたタイトルを冒頭に再度書き、自分の筆を進めさせる。

練習 次の文章は「1年間の学習で『生きる上で役に立つ』と学んだことを書きなさい。」という課題の作文である。メタ・ディスコースを除いて書き直してみよう。（・縦書き原稿用紙の書き方・書き言葉に直す・常用漢字は漢字にする・文末を統一する〔常体〕）

1年間の現代文で学んだことは、授業の始めの10分かならず読書をしていたことである。これは役に立つんじゃないかなと思う。次は作文の書き方など。ラベリングなどはこの書き方を知つていてそんはないと思った。だから役に立つたというよりは習つていてよかつたといった感じである。あとは言葉の意味調べなどは辞書などの使い方がわかる。やっぱり作文とかが一番役に立つてゐるんじやないかなと思います。